

医療班フィールドワーク(長崎大学熱帯医学研究所及び医学部)

① 長崎大学熱帯医学研究所

8月5日(日)、42名の生徒が長崎大学熱帯医学研究所主催のサマースクールに参加しました。生徒は、二見恭子助教による「世界を旅する蚊」の講演で、蚊の生体と媒介する感染症について学び、続いて橋爪真弘教授による「地球温暖化と感染症について」の講演を通じて、地球温暖化の仕組みと現状、温暖化が引き起こす環境問題と病理を学びました。講演後は疑問点について積極的に質問をする生徒の姿が見られました。パネル展示では、長崎大学熱帯医学研究所による蚊の研究と留学生を交えたアフリカの医療事情の紹介に加えて、北海道大学・東京大学・大阪大学の各ブースでは細菌やウイルスに関する映像や顕微鏡での標本観察を交えた研究紹介がなされていました。生徒はフィールドワークを通して、「虫たちが人間におよぼす害や病気、また今後の地球温暖化の影響を学ぶことができた」「自分でインターネットや本で調べるよりもわかりやすく説明してもらえたので、研究につなげていきたい」「橋爪先生の『自分達の行き次第で未来が変わる』という言葉が心に残った。これからの未来を背負って私たち若者は生きていけないと行けないのだと痛感した」などの感想を抱いており、今後の研究のヒントとともに、自分たちと世界との関わり方も学ぶことができたようです。



② 医学部

8月8日(水)、長崎大学医学部坂本キャンパスにおいて、本校医療班の生徒と医学部教授の永田康浩氏ら講師陣によるフィールドワークを、講義と実演講習の二部構成で行いました。講義では、永田教授から「医学と医療」「これからの医療」「地域医療」について、分かりやすく説明していただきました。医学と医療の違いという視点からの疑問提起から始まり、これからの地域医療は医療そのものを医者の特許特許として考えるのではなく、地域全体で医療の枠組みを形成し包括的な協力体制を整えていくことの重要性をお伝えいただきました。実演講習では、生徒は三つの班に分かれ、「胸部診察」「腹部超音波検査」「救急蘇生実習(BLS)」の機械を使った実際の模擬演習に挑戦しました。それぞれの実習において、生徒たちは見たこともさわったことも無いような機器に接し、その使い方や注意点を学ぶ中で、医療が行われることの意味がより鮮明になったようです。また将来の自分の職業や今後の自分たちの研究の見通しがつく大変よい機会にもなりました。生徒たちの興味関心や知的好奇心が大きく刺激されたようで、講義でも実演講習でも、多くの質問の手が挙がりました。

